



厚生労働省
大臣官房総合政策・政策評価審議官
ほんだ のりえ
本多 則恵
Norie Honda

Profile

- 昭和62年・労働省入省(1種(行政区分)採用)
- 平成3年・人事院長期在外研修
フランス国パリ第1大学留学(2年間)
- 平成8年・長崎県労働部職業安定課長
- 平成11年・労働省労政局労働者福祉部企画課長補佐
- 平成12年・～出産
育児休業(3ヶ月)
- 平成13年・～出産
育児休業(3ヶ月)
- 平成14年・日本労働研究機構((現)独立行政法人労働政策研究・研修機構)出向
- 平成17年・厚生労働省大臣官房総務課情報公開文書室長
大学の客員教授を併任して論文を執筆
- 平成20年・内閣府政策統括官(共生社会政策担当)
少子高齢化対策担当参事官
ワークライフバランス、高齢社会対策担当
- 平成22年・厚生労働省大臣官房参事官(賃金時間担当)
最低賃金に関する業務
- 平成24年・厚生労働省職業安定局雇用品課長
- 平成26年・厚生労働省職業安定局総務課長
- 平成28年・厚生労働省大臣官房地方課長
地方労働局の管理運営業務
- 平成29年・厚生労働省大臣官房総合政策・政策評価
～現在 審議官

※経歴一部省略

※掲載した記事は、平成29年11月～12月にインタビュー等により作成したものであり、役職等は当時のものです。

どんなに地味な仕事に

ポジティブな姿勢が キャリアアップへ

現在の厚生労働省がまだ労働省だった昭和62年に入省しました。平成11年に労政局労働者福祉部に異動になり、翌年から年子で2人の子供を出産しました。それぞれ3ヶ月間の育児休業を取得。2人目の復職後、日本労働研究機構に出向しました。

そこでは統計データの収集・分析が担当でしたが、掘り下げて研究したいテーマが見つかり、研究職ではありませんでしたが、自分で調査研究を企画して報告書をまとめました。当時はWEB調査が活用され始めた時期で、これを労働分野の調査にも使えるのだろうかという問題意識が芽生え、テーマとして取り上げました。幸いにも私の研究が関係者の目にとまり評価していただいたことで、大きな自信になりました。

平成20年には内閣府の参事官として、ワーク・ライフ・バランス憲章の改定と高齢社会白書をまとめる業務を担当。当時、高齢者の孤独死が目立っていて、高齢者を支援するNPOの活動を白書で取り上げました。白書公表後、NPOの方から「活動しやすくなった」という感想をいただきました。白書の執筆というのはやや地味な仕事ですが、民間の活動を応援できるツールにもなることを実感しました。

平成26年の職業安定局総務課長以降は、管理的な業務の比率がぐっと高まります。労働行政を実施するためのインフラである人事・予算・施設の調整や、職員からのよろず相談への対応など、黒子に徹する場面も多くなります。そこで初めて、これまで誰かがこういう仕事を引き受けてくれていたからこそ、政策の企画立案という表の仕事ができていたこと、組織の力の大きさに気づきました。

官房の地方課長の時には、職員団体との労使交渉を担当しました。厳しい場面もありましたが、労働省に入った一つの動機は「労使関係」への関心でしたので、自分が労使関係の当事者の立場を経験できる得難い機会でした。

現在は、人工知能が労働に与える影響など、労働

も、必ずやる意味があり、学べることがある

政策関係のとりまとめとILO(国際労働機関)関係の業務を行っています。

24時間保育園が、仕事と育児の両立の強い味方に

第一子が生後6ヶ月のときに私が復職し、あとを引き継いで同じ省内にいる夫が6ヶ月間の育休を取りました。育休経験を通じて夫は家事・育児に自信をつけ、現在は、わが家の家事・育児の主役は夫です。

出産前に保育園を探し、園と夫の実家との位置関係を考慮しながら住居を決め、引っ越しました。

入園した24時間保育園には小6までの夜間学童クラブも併設され、帰りが遅くなれば夕食も食べさせてくれてお風呂にも入れてくれます。

夜間保育・夜間学童というと抵抗がある人もいるかもしれませんが、大家族のような雰囲気の保育園・学童でしたし、夫婦ともに仕事でどうしても帰宅が遅くなってしまう場合に、二重保育にならずに預かってもらえるのは何より助かりました。職場には、保育園後のベビーシッターの確保に苦労している方も多かったので、24時間保育園にして良かったと思います。

また、平日の掃除と洗濯をお願いしているシルバー人材センターも、仕事と家庭の両立に不可欠なものです。

業務に精通するよう 日々勉強が必要

課長補佐に昇進したばかりの頃、補佐は実質的に仕事をいちばん仕切る立場ですし、部下を指揮する力も問われるので、自分に務まるのかと不安でたまらなかった時期がありました。上司と話していて手が震えたのを覚えているくらいです。

その後も、責任の重い仕事に異動するたびに不安を感じていますが、不安に効く特效薬はないということが経験でわかってきました。効果があるのは、まずはその業務について勉強する。わからない

ことは部下にだって教えを乞う、上司に「どうしましょうか」と聞く前に自分なりの考えを整理して提案してみる、そういった基本をちゃんとやること。要領が悪いのかもしれませんが、自分にはそれしかないのとわかって、不安は感じて迷いはなくなりました。

1日のタイムスケジュール例

7:00	起床、体操、朝食
9:30	登庁
日中	打ち合わせ、会議、外部の関係者との打ち合わせ、メール処理、資料読み、情報収集
19:00	退庁(平均して週1で飲み会)
帰宅後	夕食、入浴、オンライン英会話レッスン(30分)、読書
1:00	就寝

女性職員へのメッセージ

私にとっての仕事への原動力は、労働行政を通じて社会に貢献ができること。皆さんも、その行政に何かしら魅力を感じたからこそ、官庁に入ったのだと思います。行政の最終的な目的に、自分は役立てるのかを意識していれば、困難な状況でも乗り越えられるのではと思います。そして、行政でやりたいことがあるのなら絶対に、絶えず勉強は必要です。